

2 支援方法について（栗田支援学校の取組）

（2）主体的な参加を促す方法～分かりやすい環境設定、視覚的情報や手がかりの保障～



写真1



写真2

写真1は、小学部低学年の「朝の会」における環境設定です。このようにシンプルな環境を基本として、活動内容に沿って、「今日のスケジュール表（写真2）」などの「視覚的手がかり」をその都度教師が出し入れします。

このような配慮を行うことにより、注目すべき点が明確になり、「今、何をやっているのか」が伝わりやすくなります。

自閉症には、「構造化」が有効ですが、それは空間を「パーティションで仕切ること」だけではなく、「分かって動きやすい環境づくり」も有効であるといえます。

その学習活動にふさわしい教室環境を、子どもが自分から準備することで、活動に対する見通しと心構えができるという効果も期待できます。



写真3

最後にお楽しみの
「パズル」を設定



写真4



写真5



写真6



写真7

また、活動に見通しをもてるよう、スケジュールを示すことも重要です。スケジュールは、本人にとって便利なものでなければなりません。予定を押しつけるのではなく、好きな活動を織り交ぜたり(写真3)、選択肢を示したりすること、本人が操作していけるよう導くことがポイントになります。

(写真4)は調理の手順を示した「めくり式手順書」です。

(写真5)立ち位置を示す目印です。フラットな空間であっても、このような目印に気付いて活用できるようになると、自分でとるべき行動が分かるので、集団参加が可能になります。

(写真6)学習教材の準備も自分たちで行うために、教材の入った籠に数字カードを貼り、順番に取り組めるように工夫しています。

(写真7)朝の会で行っている、ハンカチ・ティッシュ調べの活動で使用している教材です。このトレイに置くことで、自分でチェックできます。



写真8



写真9



写真10

自閉症の子どもたちは、視覚的手がかりを活用しながら操作的に活動することを得意としています。動作を伴うことで記憶にも残ります。一方で不器用な子どもも少なくありません。使いやすく機能的な教材や教具を準備しましょう。パターンの活動を毎日繰り返しながら、成功経験を重ね、少しずつ学習の質を向上できるようにしましょう。

写真8～10は、廊下にフローリングワイパーを掛ける活動を支えるシステムです。

(写真8)回数を示すボード。一回掛け終わるごとに数字カードを下の箱に入れます。

(写真9)どこからどこまで、どのような順番で掃除するのかを示す目印を床に貼っています。

(写真10)フローリングワイパーに重しを付けて、動かすやすくしています。



写真11



写真12



写真13



写真14

各授業においては、その学習に使用する教材の準備や片付けなど一連の活動を、子どもが自分たちで行うように設定します。これにより、待ち時間がなくなるので逸脱行動を予防でき、物の扱い方や人に合わせて行動する経験など、「自立活動」の内容も同時に身に付けることができると考えます。

(写真 11、12) 学習教材の準備や片付けも子どもたちが行っています。キャスターを置く場所の目印を合わせれば、移動が可能です。

(写真 13) 学習スケジュールを示す「めくり式スケジュール」の操作も子どもが行います。活躍場面(役割)があることで、見通しをもって主体的に学習に参加できます。「めくり式スケジュール」はテレビ画面と同様に、子どもたちの注目を促すことができるため、集団の場面でもやるべきことが分かり、学習への参加意欲が向上します。

(写真 14) 高学年になると、子どもたちによる学習活動の進行も可能になります。自分たちで教材を活用しながらやりとりすることで、社会性を育むことが期待できます。

(写真 15、16) 朝の係活動の様子です。給食メニューをシートに書き写しています。出来上がったシートは、朝の会で使用し、自分が書いた物が活用されることで、目的意識をもって活動に取り組むことが可能になります。

(写真 17) 作業学習における準備活動の様子です。使用する道具や材料を正確に準備するためのシートを敷いています。

(写真 18) 扱いやすい位置に道具を配置することで学習活動がスムーズになります。目の前にある材料がなくなると、休憩にしたり報告の機会にしたりすることで、見通しをもちメリハリのある学習が展開できます。



写真 15



写真 16



写真 17



写真 18

(写真 19) 小学部低学年の国語の学習です。言葉の学びを通して、教材を介した人とのやりとりを経験できるようにしています。

教師は、子どもの手元に気をとられることなく、子どもの全体像を把握し学習への参加状況や理解度を評価しながら指導しています。

他者から評価される経験の積み重ねが、自己評価の力となり自己コントロールの基盤となります。認められる機会を確保することは、将来の自立のためにも重要です。

自閉症の子どもも、褒められること、「できた!」と実感できたことはとてもうれしく感じています。やって当たり前のことであっても、活動に取り組んでいるとき、やり遂げたときなどは、称賛しましょう(写真 20)。

評価する際のポイントは、その場ですぐ褒めることです。また、(写真21)のような評価表を使うことで、視覚的に確認できますし、振り返りに使うこともできます。さらに、必然的に評価活動がなされるので、評価される機会が保障されます。帰りの会などで「今日のがんばり」を子ども同士でも評価している学級もあります。



写真19



写真20



写真21